

## 優秀賞

# 心が体を動かした

プノンペン日本人学校中学部 3年 時任 心音

「ハアハア。」息が乱れる。呼吸が苦しい。体が重く、思い通りに動かない。遠くに聞こえるプールサイドの声援と、水中の音。視線の先にゴールの壁が見えてきた。徐々に体が麻痺する中、懸命に泳ぐ。上がる心拍数。そして、ありったけの力で壁を叩くと同時に、水飛沫が上がった。2時間で7 km。それが結果として、280 ドルの寄付金となった。

私は今、カンボジアに住んでいる。そして、いつもこんな光景を目にする。学校に行っているはずの子供が、花を売る姿。頬のこけた女性が、路上でぼんやりと宙を眺める姿。そして、片足を失った男性が松葉杖を突きながら、道路で物を乞う姿。これらの光景はカンボジアにとって日常であり、現実だ。彼らの訴えかけてくる視線に、私はいつも目を逸らす事が出来ない。日本にいた頃には、深く知る事のなかった現実に、私の心はかき乱された。

気がつくとは私は、カンボジアの貧困問題や教育について調べるようになっていた。知れば知るほど、自分が無知である事を恥じた。私の知識は、氷山の一角にすぎない。もっと知りたい、と心が強く動かされた。セミナーに参加し、当事者のお話を伺ったり、ディスカッションをしたり、記事を読んだり、社会活動を行うNGOのイベントに参加したり、様々な角度からこの問題を知った。そして、彼らの役に立ちたいという思いが日々膨らんでいった。

そんな時、カンボジアの貧困に悩む子供たちを救うチャリティースイミングが開催される事を知った。自分に何か出来る事はないかと考えていた私は、行動に起こしたいという思いで、居ても立っても居られず、両親に話し、弟を誘い、参加を決意した。

私は幼い頃からカンボジアに来るまで、競泳選手として毎日練習に明け暮れていた。既に競泳は引退していたが、自分の泳ぎが、誰かの役に立つのならと、懸命に休む事なく泳ぎ続けた。泳ぎ終わった後は、息をするのもやっとで、全身が筋肉痛で動けなかった。自分の特技が誰かの役に立てたと思うと嬉しかった。

私の夢は、教育を平等に受けられない子供たちのための、学校づくりに携わる事だ。知識は誰にも奪われる事のない、唯一の財産だと思う。教育は全ての基盤であり、世界を変える力を持っている。だからこそ学びは平等であるべきだ。しかし、カンボジアと同様に世界には、学びたくても、環境に恵まれず、学ぶ事の困難な子供たちがいる。この現状を変えていきたい。それがカンボジアで学ぶチャンスを与えてもらった、私の使命だと思うからだ。今はまだ、私が世界のために出来る事は少ないのかもしれない。しかし、これから私が世界のどこに居たとしても、彼らの視線は、絶えず私に訴えかけてくる。だから、私は学び、行動する事を決してやめない。心と体が動くままに。